

小牧正英の師「キヤトコフスカヤ」の履歴：白系露人事務局資料を元に

齋藤慶子

This article introduces a Russian ballet teacher's personal history through the examination of unpublished materials from the Bureau for Russian emigrants in the Manchurian Empire archive. The woman was a ballet teacher of Masahide Komaki - one of the greatest Japanese dancers and choreographers since World War 2. He had often changed his words when he wrote or spoke about his ballet teacher. Until recently we have not known much about him despite the significance of his work in Japanese ballet history.

He wrote his own ballet teacher's name as "Kyatkovskaya" in his books, but her real name was "Kvyatkovskaya Elizaveta Vasilevna." She was born in a Russian province in 1887, worked as a prima ballet dancer in opera theaters, and toured Russia with opera troupes.

After the Russian revolution, she escaped from Russian communists and arrived in Harbin in 1920, where she started to teach ballet in her own studio. However, the life of emigrants was very unstable. The Soviet government often disturbed her work.

At that time some emigrants' organizations cooperated with the Manchurian government and helped her by providing a venue for her studio work. Thanks to her Japanese relationship she could continue her work.

After World War II, the memory about the great purge held by Soviet government was fresh. A relationship with foreign countries could become a reason for punishment. Maybe for this reason Masahide Komaki could not explain the true history about his teacher.

日本人で初めてロシアの本格的なバレエ教育を修了したという経歴をひっさげて戦後の日本に突然現れ、日本初の『白鳥の湖』全幕上演を行うほか、日本有数のバレエ団を立ち上げて日本のバレエ界をけん引したのが小牧正英（1911-2006）である。

それまでの日本人が受けてきたバレエ教育といえば、1920年代から日本に定住してバレエ教育を行った初めてのロシア人教師のエリアナ・パヴロバ（1897-1941）は、職業舞踊学校を出ていなかった。彼女による教育の質の低さが当時から指摘されていたことは、すでに川島京子『日本バレエの母 エリアナ・パヴロバ』¹に明らかにされている。1936年来日し、日本劇場で約20年にわたって教えたオリガ・サファイア（1907-1981）は、レニングラードの国立舞踊学校を卒業した経歴がありながら、活動場所をレビューを主な公演内容とする日本劇場に限定したために、期待されていたほどには「正しいバレエ教育」が日本に普及しなかった、という評価を稲田奈緒美が論稿「日本バレエの創成期におけるバレエ教育」²の中で行っている。

これら先達の後に現れた小牧正英は、一般には「ロシア式のバレエ教育を受けた」ということになっているが、じつは本人も自分が受けてきたバレエ教育については様々な発言を行っており、不確かなところが多いのも事実である³。このたび、彼が受けたハルビンでのバレエ教育に関連して、未発表の資料が見つかったので、紹介したい。

1. クヴァトコフスカヤのハルビン時代

小牧正英（本名：菊池榮一）は1911年9月25日に岩手県に生まれ、目白商業学校卒業後の1933年以降に渡満。ハルビンにてロシア人からバレエを習い、1940年前後から上海に移り、バレエ団「上海バレエ・ルッス」でダンサーとして活躍した。ここで紹介するのは、小牧がハルビンでレッスンを受けたロシア人の履歴書である。小牧は自著の中で師の名前を「キヤトコフスカヤ・エレザヴェーター・ワスレヴナー」と表記していたが⁴、正しくはクヴァトコフスカヤ・エリザヴェータ・ワシリエヴナ（Квятковская, Елизавета Васильевна 1887 год.）⁵という。見つかったのは、現在ハバロフスク地方国立文書館に所蔵されているクヴァトコフスカヤの履歴書である⁶。文書館には、「白系露人事務局Бюро по делам российских эмигрантов」による彼女への1935年と1939年の2回のアンケート調査記録⁷と、本人自筆と思われる履歴書が1枚⁸、「ハバロフスク地方国家安全局Отдел УМГБ ХК」の役人による「証明書Справка」⁹が収められている。内容は彼女のいわば身元調査書である。これらの書類が作成され、保存された経緯は後述するとして、この中の、「ニッポンジンのうちで知り合いは？」という項目に「スタジオの生徒コンマキ-サンУченик студии Конмаки-сан」¹⁰と記載されているのである。記録によれば、クヴァトコフスカヤは1887年9

月10日、ニジニ・タギル（Нижний Тагил）という町で、鉱山技師クヴァトコフスキー・ワシリー・コンスタンチノヴィチのもとに産まれた¹¹。バレエ教育は、モスクワにあったらしい「ワルシャワ劇場のプリマ・バレリーナM.リンチェフスカヤ¹²とミラノの学校出身のバレリーナM.エジョワエヤ〔判読困難〕の私立バレエ学校」¹³で受けた。つまり、少なくともロシアの帝室（国立）バレエ学校ではなかった。クヴァトコフスカヤは1910年から、様々な歌劇団の中のプリマ・バレリーナとして、カザンや、エカテリンブルグ、ウラジオストク、モスクワ、ジトミル、ミンスクなどで活動した。1919年にはポリシェビキから逃げるためにエカテリンブルグを去り、1920年にハルビンにたどり着いた。ハルビンの歌劇場にプリマとして出演するほか、教育も行った。

この頃のハルビンは、内戦の戦火を逃れてやってきた大勢のロシア人アーティストたちにとってのメッカの様相を呈していた。1898年から帝政ロシアによって中東鉄道を中心とした都市の建設が行われていたハルビンは、移住者の避難地として選ばれる環境を備えていたのである。演劇についていえば、1922年の時点で500名の舞台関係者が街に登録されており、そのうちじつに300名が俳優だったそうで、逆に言えば生き残りをかけた熾烈な争いが繰り返され、演劇活動がたいへん盛大に行われていたという¹⁴。

1922年から教え始めた「第一音楽学校Первая музыкальная школа」付属の「個人スタジオ」がクヴァトコフスカヤの主な教育の場となる。第一音楽学校は、1921年創立の、ロシア音楽協会のプログラムに沿って教育を行ったハルビンで初めての音楽学校で、何度か場所を移りながら約四半世紀にわたって存続していた¹⁵。

しかしハルビンも避難民にとって安住の地ではなかった。1924年に奉ソ協定が締結された流れで、中東鉄道は中ソ合弁の営利企業に移行した。その際に、ソ連政府は避難民を解雇することを求めた。鉄道関係者が自分の仕事場を守るには、ソ連もしくは中国の国籍をとらなければならなくなったのである¹⁶。このソ連による圧力はクヴァトコフスカヤの身にも及んだ。鉄道局のポリシェビキの指令により、舞台を去ることになった¹⁷。この後、時局の変化に翻弄されながらも、クヴァトコフスカヤは時に振付の仕事を得るほか、自分のスタジオ以外に、1932年から1935年まで、「音楽テクニックМузыкальный техникум」¹⁸に招かれて、週に3回ずつ教えていた。

その最後の年である1935年といえば、ソ連が中東鉄道を「満州国〔以下、括弧なしで表記〕」へ売却し、ソ連国籍の鉄道関係者が大挙して満州から引き揚げた年だった。鉄道売却の直前に白系露

人事務局が設立され、すべての亡命ロシア人に事務局への登録が義務付けられた。白系露人事務局については、これまでに日露の研究者たちによって多くの研究成果が世に送り出されている¹⁹。歴史家のアウリレネによれば、白系露人事務局の誕生には2つの力が働いているという。一方は、亡命ロシア人を対ソ連勢力として取り込もうとする日本の特務機関の思惑であり、他方は自分たちの権利を主張するために結束の必要を感じながらもそれが実現できていなかった亡命ロシア人たちの要望であった。日本の特務機関によって設立された事務局の記録には、1935年の時点で17歳以上の23,500人の亡命者と163の団体が登録されていた²⁰。クヴァトコフスカヤの記録もこうして残されたのである。事務局は亡命ロシア人の法律上の権利、経済活動、文化活動を保護するという名目を掲げながら、それらの活動のすべてを掌握し、また指導を行ったのである。事務局の運営費は、登録されている亡命者の稼ぎから1パーセントの他、出版業や、慈善催事、事務局の不動産業で賄われていたほか、日本の特務機関からもいくらかの支援があったとされ、劇場活動もその恩恵にあずかっていたという²¹。

1935年、クヴァトコフスカヤはソ連国籍の取得を拒否したことにより、音楽テクニックでの職を失う²²。第一音楽学校の文言もこれ以降記録に現れないことから、音楽学校とのつながりも切れたようである。しかしながら、1939年に書かれた2度目のアンケート記録をたどると、場所を移りながらも彼女はスタジオを続けることができたことがわかる。

記録によれば、まず1936年からは、ソ連当局に敵対する白系ロシア人の団体「三銃士クラブ」のもとでスタジオ活動を続けた。1924年に始まった三銃士クラブは、もともとは学校の遊び仲間が4人集まってできた友人同士の集まりだったが、次第に構成人数を増やし、ソ連政府に肩入れをする「赤」系の団体に敵対するようになり、一時期は血で血を洗う事態にまで陥っていた。1930年代半ばには満州国のハルビンにおける勢力が強まり、迎合しない亡命人団体は閉鎖の憂き目にあった。ソ連側につかないのであれば、日本に組するよりほかに道が残されていなかったのである。1936年は、三銃士クラブが白系露人事務局の管理下に入った年でもあった²³。

1938年にこの団体が実質上消滅すると、クヴァトコフスカヤのスタジオはYMCA（キリスト教青年会）の傘下に入る。YMCAは、満州国統治下で1938年に北米YMCA同盟から日本YMCA同盟に移管されていた²⁴。小牧はYMCAと同じところでレッスンを受けていたとのことなので、このことになるだろう²⁵。

つまり、1935年に職場を失ってからも、クヴァトコフスカヤがバレエの仕事で生きていくことができたのは、日本に縁のある団体に渡りをつけることによってこそ可能になったらしいことがわかるのである。

1940年前後のクヴァトコフスカヤとの別離の際に、彼女が小牧に送ったとされる言葉「コースチャ（私〔小牧〕の愛称）、お前によって私の日本人観は変わった。日本人も私たちと同じ心をもった人間であることを教えてくれた。今日までよく誠実に自分に仕えたことは、本当に嬉しい。私は、お前によって日本人にバレエを継承できたことはとても満足している。」²⁶には、白系ロシア人という不安定な身の上で、事実婚関係にあった夫にも1922年に先立たれて天涯孤独の彼女の生活を支えたことへの感謝も込められているのではないだろうか。

2、クヴァトコフスカヤとアンドレーエワのクラス

ところで、小牧は自著『ペトルウシユカの独白』において、自分が通っていたバレエ学校には「キョトコフスカヤ・クラスとアンドレーヴァ・クラス」があったと記している。しかしこれも、実際のところ少し事情が違ったようである。第一音楽学校付属のクヴァトコフスカヤのスタジオは1933年から埠頭区（プリスタン）の「商業クラブКоммерческое собрание」に場所を移していた²⁷。そして、他方のアンドレーエワの個人バレエ・スタジオもまたこの商業クラブを主な活動場所としていた。同じ場所でバレエを教えてはいたが、まったく違う団体だったのである。

ここで両者のスタジオの評判を雑誌等に求めたい²⁸。クヴァトコフスカヤのスタジオで1937年から学び、ダンサーとして活躍したネズヴェツカヤは次のように述べた。

これは、クラスごとにわかれた学校ではなかった。そうではなくて、エリザヴェータ・ワシリエヴナは、児童生徒の場合はイロハから教えてだんだんと先に進ませるのに対して、ダンサーが相手の時は将来に必要な知識を与えるのみだった。彼女の元では多くの者が幾年も続けて学び、そして中にはプロフェッショナルまでもがより短期間で、「伸びをする〔成長する〕」ためにやってくる。なぜなら、エリザヴェータ・ワシリエヴナは、流派の技術に精通し、それを厳格に教えることで有名だったからである。²⁹

つまり、学校のように、学年わけもクラス分けもなく、いろいろな条件の生徒たちが集まっていたものの、クヴァトコフスカヤは個別に対応できる、たいへん優れた教師だったらしいことがわかる。突然現れた、しかもすでに成人の小牧にも

丁寧な指導を施してくれたのではないだろうか。

それに対して、個人のスタジオとしてかなり大所帯だったのがアンドレーエワ・アンナ・ニコラエヴナ（Андреева, Анна Николаевна 1887 год.）のスタジオである。アンドレーエワ自身がどのようなバレエ教育を受けた人だったのかはこれからの調査が必要になる。1929年の設立以降、毎年50～60人の女性と少数の少年が学び、教育科目もキャラクター・ダンスやデュエット、タップダンスなど時により多岐にわたり、「バレエ学校」とみなしてもよいほどにおおがかりな教育活動を展開していたらしい³⁰。

特異なバックグラウンドの小牧にしてみれば、大所帯のアンドレーエワのスタジオよりも、個別指導に秀でていたという評判のクヴァトコフスカヤにつけたのはより幸運なことだったのではないだろうか。

3、クヴァトコフスカヤの晩年

小牧は恩師クヴァトコフスカヤについて、「私とほかの5人の生徒の成長を見とどけてから、この世を捨てモナストリーとなって、ギリシア正教の寺院奥深く入ってしまった。」³¹というふうには書いていたが、実際は、クヴァトコフスカヤは大連において教育活動を再開していた。

最後の生徒であり、彼女をみとったヤストレボワの手稿が『ロシアのハルビン』に掲載されている³²。それによれば、友人の歌手テオドリジと共に大連近くのカガハシ駅に所在した修道院に1941年に入った。しかしながら、そこでは、何か丸太のようなものをあちらからこちらへと移動させることを強いられ、二人のアーティストには生活が合わなかったため、大連へと引っ越した。そしてクヴァトコフスカヤの教師生活が再開されたのである。1957年にヤストレボワは家族とともにオーストラリアに移住し、すぐにクヴァトコフスカヤを呼び寄せ、できたばかりの快適な老人ホームに住ませた。

死の少し前に脳卒中を起こし、会話は困難になったが、最後まで足腰はしっかりと、美しいフォームを保ったままだったという。彼女はオーストラリアのロシア人墓地に眠っている。

最後に

クヴァトコフスカヤは、平穏な生涯を送ったとはとても言い難いが、それでも生き延びること自体が困難だったあの時代にして、周りの人々によく支えられて生きてのだったと思われる。それは、彼女の人の徳のなせる業だったかもしれない。

ハルビンで生活していた人々は「ハルビン人」としてソ連では異人種として不当な扱いを受けたり、もしくはソ連国籍を取得して帰国を決めても、

突然ラーゲリに送られて強制労働によって命を落とす例もまれではなかった。ソ連政府に対して積極的な反対活動を行っていた者は死刑に処せられた。1937年から1938年の大粛清の嵐が吹き荒れた後も、外国とのつながりが疑われる人物は不幸な末路を辿らされるのが少なくとも50年代頃までは続いていた。白系露人事務局で集められた履歴

書は、ソ連側によってのちにこのような「政治犯」の特定にも活用されていたのである。

小牧が、自分の受けた教育歴について、特に帰国直後にとても事実とは思われない発言をしているのは、クヴァトコフスカヤが余計な疑いをかけられてはいけないという配慮があったのだと考えられる。

【小牧正英本人によるバレエ習得歴の記述】

●1946年8月1日発行『オール女性』8月号。8頁。
「還ってきた人々（2）バレエの惑星 踊る 小牧正英快談記」
昭和7年（1932年）、中学卒業後すぐに出国。ハルビンにあった国家経営の舞踊学校でトロボス（アカデミー出身）に3年間習う。満州事変ののちに北鉄が昭和9年（1934年）に接収される。
トロボスとカルガノワ夫人（ピアニスト）の推薦で入ったアカデミーで、昭和9年から15年（1940年）までの6年間学ぶ。
ハルビンへ帰っていると、上海のバレエ・ルッスから招かれた。
[トロボスの身元不明]

●1948年2月15日発行『日映』No.11, 12合併号。頁記載なし。
「『幸運の椅子』に出演の藝術家紹介 小牧正英」
中学卒業後、ハルビンに渡る。
モスクワ舞踊学校出身のトロボス氏の元で3年間学ぶ。また、ゴルスキー氏の高弟ウォルスキー氏に古典バレエを学ぶ。後、上海に渡る。
[ウォルスキーの身元不明]

●小牧正英『ペトルウシュカの独白』三恵書房、1975年。31頁。
「私たちのバレエ・クラス卒業記念合同公演というものがあって、キャトコフスカヤ・クラスとアンドレーヴァ・クラスの合同によって行なわれるバレエ公演『胡桃割り人形』が発表された。」
[実際は、卒業公演ではなく、アンドレーエワがハルビンの全ダンサーを集めて1942年にハルビンで初演した『くるみ割り人形』の公演。小牧はレオ・ド・オノレの名義で出演：Л. Ж. Балет П. И. Чайковского в Харбине: К постановке «Щелкунчика» А. Н. Андреевовой // Рубеж. 1942, № 11-14 марта, С. 9.]

160 - 162頁。
「私の教師の名前はキャトコフスカヤ・エレザヴェーター・ワスレヴナーという老婦人で、この教師は、私とほかの5人の生徒の成長を見とどけてから、この世を捨てモナストリーとなって、ギリシア正教の寺院奥深く入ってしまった。」
別離に際して
「師は私に向い、『コースチャ（私の愛称）、お前によって私の日本人観は変わった。日本人も私たちと同じ心をもった人間であることを教えてくれた。今日までよく誠実に自分に仕えたことは、本当に嬉しい。私は、お前によって日本人にバレエを継承できたことはとても満足している。』[……]キャトコフスカヤは、偉大な舞踊教師ヨハンセンの薫陶を受けたバレエのサラブレッドであり、いわばわれわれはその孫弟子に当たるからである。」

●小牧正英『バレエへの招待』日本放送出版協会、1979年。13頁。
「ハルビン市音楽バレエ学校のキャトコフスカヤ先生の最後の弟子であった私」
別離に際して
「コースチャ（私の愛称）お前は本当に努力してくれたね。私はお前によって日本人に対する考えが変わった。日本人も私達と同じように芸術を愛し、美に仕える下僕であるということを私に教えてくれた。」

●小牧正英『晴れた空に… 舞踊家の汗の中から』未来社、1984年。139頁。
「バレエ学校の私の先生は、キャトコフスカヤ・エレザヴェーター・ワスレヴナーという舞姫で、ポーランド系ロシア人であった。バレエ教師になる前はオデッサのプリマ・バレリーナで出身はワルソー国立バレエのグスタフ・ヨハンソン（19世紀おわりから20世紀はじめのもっとも偉大なバレエ教師、デンマーク人）の愛弟子であった。」[少なくとも、クヴァトコフスカヤの履歴にはオデッサに滞在したことの記録はない。グスタフ・ヨハ

ンソンの身元不明。]

195頁。

「松島 君の学校はなんといったかな。

小牧 ハルピン音楽バレエ学校、なんがん街のYMCAと同じところにあった。」

※「なんがん街」は「南崗」。1938年に新市街（ノブ・ゴード）の馬家溝河以北が南崗区とされた。



エリザヴェータ・クヴァトコフスカヤ
ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014.

- 1 川島京子『日本バレエの母 エリアナ・バヴロバ』早稲田大学出版部、2012年。
- 2 稲田奈緒美「日本バレエの創成期におけるバレエ教育」『[昭和音楽大学] 研究紀要 31』2012年、122-135頁。
- 3 末尾の資料「小牧正英本人によるバレエ習得歴の記述」参照。
- 4 小牧正英『ペトルウシユカの独白』三恵書房、1975年、160頁。
- 5 クヴァトコフスカヤ [姓]・エリザヴェータ [名]・ワシリエヴァ [父称]
- 6 Государственный архив Хабаровского края [以下ГАХК] ф. Р830. оп. 3. д. 20014. ロシア語の資料は全て拙訳。
- 7 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 1-7об.
- 8 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 8.
- 9 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 10. 彼女の履歴をごく短くまとめたもの。
- 10 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 6 об.
- 11 ニジニ・タギルは現在スヴェルドロフスク州にあるが、当時はペルミの管轄で、アンケートには「ペルミ県」と書かれている。ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 1.
- 12 リンチェフスカヤの在籍期間についてワルシャワ大劇場広報室のアダム・コザル氏に問い合わせた。「M. リンチェフスカヤ」というダンサーの記録は劇場保管ファイルの中には見つからなかったと2018年8月13日にメール回答いただいた。ただし、2018年9月3日の追伸メールにて、ポーランド国立図書館に「Maria Lenczewska マリア・リンチェフスカ」というポーランドの女性ダンサーの写真が所蔵されているという情報を寄せていただいた。クヴァトコフスカヤが「Ленчевская リンチェフスカヤ」と書いたのは、クヴァトコフスカヤが語尾をロシア人名の形にして書いた可能性も考えられる。ポーランド国立図書館サイト <https://polona.pl/item/maria-lenczewska-w-kreacji-scenicznej.NTYwNDly/0/#info:metadata> (2018年9月5日閲覧)
- 13 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 8. «Специальное обр. частная балетная школа. У прима балерины Варшавск. театр. М Ленчевской и балерины Миланской школы М Эжюваен»
- 14 Мелихов Г. В. Белый Харбин: середина 20-х. М.: Русский путь, 2003. С. 114.
- 15 Культурная жизнь российской эмиграции в Китае в 20-40-е года XX века. Автор: Говердовская Л.Ф., редактор: Александрова Л.И. https://abc.vvsu.ru/Books/up_kult_zhiznj_ros_emigr_v_kitaje/page0003.asp (2017年9月27日 閲覧)
- 16 Аурилене Е. Е. Российская диаспора в Китае (1920-1950-е гг.). Хабаровск : Частная коллекция, 2008. С. 12.
- 17 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 5об.
- 18 テフニクムとは、中等技術学校、中等専門学校のこと。
- 19 中嶋毅「ある亡命ロシア人の半生：『ハルビン・フォンド』にみる在満白系ロシア人の世界」『新史料で読むロシア史』山川社、2013年。
生田美智子「ハルビンの白系露人事務総局の活動」『満洲におけるロシア人の社会と生活：日本人との接触と交流』ミネルヴァ書房、2013年。ほか。
- 20 Аурилене Е. Е. Российская диаспора в Китае. С. 48-50.
- 21 Аурилене Е. Е. Российская диаспора в Китае. С. 53, 63.
- 22 ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 6об.
- 23 Смирнов С. В. «Один за всех и все за одного»: Союз русских «мушкетеров» в Северо-Восточном Китае // Проблемы дальнего востока. Январь-февраль 2015. С. 101, 102.
- 24 生田美智子『女たちの満洲：多民族空間を生きて』

- 大阪大学出版会, 2015年, 85頁。
- ²⁵ 小牧正英, 松島正幸「小牧正英を圍繞するもの 連続対談2 おゝ, ハルピン」『The TES Graphic Ballet & Dance』Vol.3-4.5, テスカルチャーセンター出版部, 東京, 1979年, 95頁。「小牧 ハルピン音楽バレエ学校, なんがん街のYMCAと同じところにあった」
- ²⁶ 小牧正英『ペトルウシユカの独白』三恵書房, 1975年, 161-162頁。
- ²⁷ ГАХК ф. Р830. оп. 3. д. 20014. л. 6. 1932年のテフニクムの所在地は調査中。
- ²⁸ Хисамутдинов А. А. Русский балет в Китае [Электронный ресурс] Владивосток : Изд-во Дальневост. ун-та, 2015. С. 7. 左記文献『中国におけるロシア・バレエ』に, 中国で活動していたロシアのバレエ・ダンサーに関連する雑誌記事がまとめられている。
- ²⁹ Недзвецкая Н. В. О творчестве балетных артистов в городе Харбине // Политехник. Австралия, 1979. № 10. С. 175.
- ³⁰ Хисамутдинов, А. А. Русский балет в Китае. С. 7-9.
- ³¹ 小牧正英『ペトルウシユカの独白』三恵書房, 1975年, 160頁。
- ³² Ястребова Л. А. Воспоминания о балетмейстере Е. В. Квятковской // Русский Харбин: 2-е издание, исправленное и дополненное. М: Изд-во МГУ : Наука, 2005. С.172-175.